

季刊

博物館だより

FUKUSHIMA MUSEUM
QUARTERLY

URL <http://www.general-museum.fks.ed.jp>

85

夏の企画展

「樹と竹」

—列島の文化、北から南から—

福島県立博物館



夏の企画展

「樹と竹」―列島の文化、北から南から―

会期 7月21日(土)～9月17日(月・祝)

「樹と竹」―列島の文化、北から南から―というタイトル名からして、どのような内容のものか、疑問をいだかれる方が多いと思います。

今回の企画展は、当館と鹿児島県歴史資料センター黎明館との共同企画で開催されます。福島県は東北の南端に、鹿児島県は九州の南端に位置します。東北の寒冷・雪、九州の温暖・雨という気候がイメージされ、まさに北国・南国という対照的な風土にあります。それぞれの気候による植生をみると、東北の落葉広葉樹林、九州の照葉樹林という植生環境があり、北のブナ林・南の竹林という景観がみられます。

この企画展は、北のブナ林と南の竹林という植生の中で、人々はどのように生きてきたかを、福島と鹿児島島の北と南の博物館から考えようと企画しました。展示内容は福島県、鹿児島県という二県のみでなく、北は福島から東北、北海道、樺太、東北アジアへ、南は鹿児島から沖縄、東シナ海を介して東南アジアへと、東シナ海・日本海を含めた「東アジア内海世界」という枠組みのもとに構成しています。東アジアの中の日本、列島の文化を北からと南から見ようとするものです。

主な見どころを紹介しましょう。まず、「北と南の生業(なりわい)」として、ブナ林と竹林の生産活動を農業・漁業・狩猟等について、生産用具を中心に紹介します。北の『会津農書』、南の『成形図説』という近世の農業技術書から、北と南の農業を紹介します。北の焼畑と南の焼



腰籠 青森県青森市 (田中忠三郎氏蔵)

東北の樹皮民具
(下右) 皮箕 福島県大沼郡三島町 (館蔵)
(下右) 穀すくい、(上左) ビク、(上中) 腰籠、(上右) 背負籠 青森県青森市 (田中忠三郎氏蔵)

畑の相違、特に南の竹の焼畑について、ラオス等東南アジアの焼畑と比較しながら、その系譜を考えます。

次に、樹と竹の民具(生活用具)をテーマごとに取りあげ、北と南の相違・共通点等と比較しながら紹介します。特に、樹皮と竹を中軸に、箕・魚籠・釜・背負具・織物などを展示します。樹皮製民具は、落葉広葉樹林の文化の一例です。一方、照葉樹林の文化を象徴するのは竹の民具といえます。南九州には多種多様な竹が自生し、人々はそれを籠やザル等の生活用具に利用してきました。

東北地方は積雪寒冷の地域が多く、竹の自生は少なく、竹の代用として樹皮を裂いて編んだり、また蔓を編んだりしてザルや籠を製作して生活に利用してきました。また豊富な落葉広葉樹を利用してきました。刳物と呼び、内部を刳り抜いて容器等を製作し、多種多様な生活用具が今日まで遺されてきました。南九州から東南アジアと比較すると、圧倒的に東北は刳物が多く、対照的な関係にあります。また北と南に形態が共通しながらも、部分的に地域差が見られるものもあります。北の樹皮箕に対し南の竹箕です。鹿児島県奄美諸島から東南アジアのラオスなどには、丸型の箕もあります。

このように北と南の文化を、民具を中心に比較しながら、列島の文化を北から南から考えます。そして北と南の文化の交叉なども考えようと企画しました。北と南の民具から、列島の文化を一緒に考えてみませんか。

(民俗担当 佐々木長生)



鹿児島のビク(左)とラオスのビク(右)
(鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵)



バラ箕 鹿児島県日置市吹上町
(鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵)



オリッカ
福島県大沼郡会津美里町 (館蔵)



刳物：小白・刳抜桶・刳抜酒樽
青森県青森市 (田中忠三郎氏蔵)

関連行事

○記念シンポジウム
「樹と竹―列島の文化、北から南から」
パネラー 物質文化研究所一舎代表 名久井文明さん
鹿児島県歴史資料センター黎明館学芸課長
福島県立博物館学芸員 川野和昭さん
福島県立博物館長 佐々木長生
コーディネーター 福島県立博物館長 赤坂憲雄
日時 七月二二日(日)午後一時半～四時半

○記念講演会
「もう一つの日本文化」
講師 福島県文化財センター白河館館長 藤本強さん
日時 七月二九日(日)午後一時半～三時

■夏の企画展「樹と竹―列島の文化、北から南から」は、七月二二日(土)～九月一七日(月・祝)まで開催しています。
■観覧料 一般・大学生五〇〇円(四〇〇円) / 高校生三〇〇円(二四〇円) / 小中学生二〇〇円(一六〇円) () は二〇名以上の団体料金です。

「新編陸奥国風土記巻之五

会津郡・耶麻郡その二

関連事業

◎展示と解説会 当館学芸員 森 幸彦

「まほろん」を知っていますか。白河市にある福島県文化財センター白河館の愛称です。この施設は福島県教育委員会が発掘調査した資料、つまり遺跡から出土した考古遺物を全て保管している所です。平成一三年に設立されました。一三人の学芸員は全員考古学専門職員です。考古学に特化した施設なのでちよつと近寄りたがたい感がありますが、実は展示や体験学習など子ども向けを強く意識して創られているので、とても親しみやすい施設なのです。イメー



展示室入口
看板のイラストがヒコ君とミズキちゃん

展示でも活躍していました。まほろんではその膨大な収蔵資料を皆さんにわかりやすく見ていただくため、毎年県内各地域ごとに遺跡や遺物を紹介する展示を企画しています。その地域区分が古代における行政単位の「郡」なのです。これまで白河・磐城・岩瀬・安積を終え、今回がいよいよ会津郡というわけです。会津のものを会津で紹介したい：博物館とまほろんとの連携で移動展が実現しました。会津の資料はとも多いので、まずは「その一」で縄文時代・弥生時代の資料を紹介し、来年度の「その二」は古墳・奈良・平安時代の資料紹介を予定しています。残った地域も気になりますね。今後、宇多、行方、標葉、信夫各郡が紹介されることでしょう。

さて、会津の縄文時代と弥生時代の展示。圧巻は猪苗代町と磐梯町にまたがる法正尻遺跡の縄文土器です。器面を埋め尽くす精緻な文様と大胆な装飾が施された今から約四五〇〇年前の土器は、会津縄文文化の華と映ったのではないのでしょうか。また、三島町のご協力を得て、荒屋敷遺跡から出土した縄文時代晩期の木製品や漆製品を展示しました。縄文人の優れた加工技術を目のあたりにできたことでしょう。弥生時代の注目点は会津美里町の協力で展示させていただいた油田遺跡の資料を中心としたお墓の変遷です。会津若松市の桜町遺跡で見つかった方形周溝墓と呼ばれるお墓からは次の古墳時代へと続く地方豪族の成長を見て取ることができたと思います。

四月二十八日(土)には解説会を行い、三〇人ほどの方々に聞いていただきました。縄文人が土器に込めた祈りと心、縄文土器の縄の文様に世界をつなぐ意味があること、土器が単に煮炊きをする道具ではなくあらゆる生命を再生させる装置であることな



猪苗代町・磐梯町 法正尻遺跡から出土した縄文土器の展示

ど大胆な推理をお話しました。隅のほうで女子高生二人が熱心に耳を傾けてくれていました。終了後女子高生たちは、柳津の縄文遺跡を知っていますか、と問いかけてきました。とても興味深げなので、一枚のチラシを渡しました。ちょうど募集中だった「高校生のための考古学基礎講座」の案内チラシです。「えっ、こんなのあるんだ。ラッキー、ぜひ参加しまーす。」と即決。「なんか私たち博物館と赤い糸でつながってたみたいだね」「赤い縄でつながってんじゃない。」彼女たちの言葉が中年学芸員の心に残りました。

(考古担当 森 幸彦)

Q..くらしに生かされてきた樹皮にはどんなものがありますか？

A..サワグルミ、シナノキ、ケヤキ、サクラ、シラカバ、キハダ、ウリハダカエデ、ホウノキ、ヤマブドウ、フジなどがあります。

直径二五cm程度のサワグルミの樹皮は適度に厚くて広い上に柔軟性に富んでいることから古くは箕に利用されることが多かったです。このように樹皮を素材にしてつくられた箕を皮箕といいますが、ケヤキも皮箕に利用されます。ケヤキの皮箕は耐久性には優れていますが、板のように堅くてふるつたとき穀物のはじいてしまうため、サワグルミの方が使い易いようです。サワグルミに似た樹木にオニグルミが

くらしの

中の樹皮

あります。昭和村の山内善次さん(八五歳)は、水に浸けたときの強さではオニグルミが一番だといえます。この性質を生かして、マグワでシロカキをするときマグワと馬の間の綱で水に浸かる部分にオニグルミを使うと、馬がいくら引いても決して切れることはなかったといえます。また、現在でも奥会津の山間部を訪れるとオニグルミやヤマブドウの樹皮を約一cm幅の短冊状に裂いたもので小さな袋状に編み、その中に砥石を入れ腰に下げて草刈りなどをして

いる光景もたまに見られます。シナノキの樹皮は「シナツ皮」とか「ムワダ」と呼ばれています。まず、剥いだ樹皮を一〇日程度水に浸けておくとまるで紙のように一枚一枚剥がすこ

とができます。これを天日で干してから用途に応じて狭くあるいは広く裂いてそれに縫いをかけ縄にして利用することが多いです。細い縄はスカリ(腰籠)や背負い籠に、太い縄は荷縄などとして用いられてきました。これは麻と同様とても丈夫な縄となります。

檜枝岐の猟師が使ってきた箕は、襟から肩にかけてヤマブドウの皮を垂らし襟の部分はシナツ皮の細い縄でヤマブドウを編み込み固定されています。ヒロロ(和名・ミヤマカンスゲ)だけで編まれた箕に比べずいぶん重くなりますが強度の面で数倍勝ります。

サクラやカバの樹皮は樺細工としてよく知られています。皮に磨きをかけ、木でつくられた容器の表

Q&A

回答者
民俗担当
鈴木克彦

面に貼って装飾を施します。南相馬市の小高箕は、一番擦り切れやすい口の部分にサクラの皮が編み込まれています。こうすることで強度はもちろん美しさも際立たせています。キハダの樹皮は煎じて飲めば胃の薬となり、布を浸せば爽やかな黄色に染め上がります。青味を帯びたウリハダカエデの樹皮はフジの皮と同じく箕を編むときの縦糸として使われたり縄として利用されてきました。ヤマブドウの皮は乾くと硬くなりますが、水分を加えると柔らかくなります。また、使い込むほどに艶としっとり感が出てきます。こうした理由から編み組細工の素材として幅広く利用されています。また、ヤマブドウのユニークな活用法としては、野良仕事の際に表皮を



①サワグルミの皮剥(山内善次さん) ②サワグルミの皮箕で粉殻をふき飛ばす(山内オマツさん) ③サワグルミの表皮 ④オニグルミの皮でつくった網 ⑤檜枝岐の猟師が身に着けていた箕

荒縄にして頭に巻き、火を付けて燻すことでブヨや蚊除けに役立たせたりもしました。

Q..樹皮を剥ぎ取るのはいつ頃ですか？

A..晩秋、葉を全て落とした樹は水分が極端に少なくなります。そして、樹は冬眠に入ります。この時期の樹皮は非常に剥れにくいですが、雪国で木が再び活動を開始するのは春のお彼岸の頃です。春の彼岸を境に木は再び水を吸い上げ、水と活力をその内側にみなぎらせていきます。民具の素材になる樹皮を剥ぐ場合は、木がたっぷり水分を含み皮の部分が一番厚くなった時期に剥がすといわれています。この時期を只見町の長老たちに尋ねると「皮を剥がすのに一番ええのは六月中ごろだべなあ」との返事が返ってきました。

小川芋銭「飲中八仙図」 と田代蘇陽

川延安直 美術担当

楽しそうな八人の酔っぱらい。本図は、中国唐代の詩人・杜甫の詩「飲中八仙歌」に詠われた八人の人物を、画家小川芋銭が描いたものです。芋銭は、慶應四年（二八六八）、牛久藩大目付の子として生まれました。まず洋画、後に南画を学び、二一歳で『朝野新聞』客員となってからは、新聞挿絵や漫画でも活躍しました。東洋的感性のあふれる、ユーモラスな画風は独自のもので、富岡鉄斎以後の南画の第一人者と目されます。本図の八仙の姿にも漫画仕込みのユーモアが発揮されています。画壇とは一線を画した姿勢と画風は、周囲の信望を集



「飲中八仙図」小川芋銭筆 個人蔵

めました。昭和十三年（一九三八）没。

また、芋銭に本図を依頼したと思われる人物が山都（現・喜多方市山都町）の実業家田代蘇陽（本名与三久）です。蘇陽は耶麻郡山都村で明治四年（一八七一）一〇月一日に生まれました。田代家は酒造業を営み、農地山林を持つ素封家で、蘇陽は家業に従いながら、山都村議会議員となり、実業家として頭角を現します。福島金融界で指導者の立場となり、さらに、電力事業にも貢献しました。昭和二年（一九五四）没。

蘇陽は、県下きつての美術通でもありました。早くから文芸に深い関心を寄せていましたが、明治四四年（一九一〇）一〇月、会津若松の長尾柳涯にもなわれ小川芋銭が田代家を訪れてから、蘇陽は美術への関心を急速に深め、書画の購入が急増します。四四年から七年間で購入額四三九九円二〇銭が費やされ、ここに千点を越える一大コレクションが形成されました。しかし、蘇陽はコレクションを秘蔵するだけの趣味的コレクターではありませんでした。積極的に画家を招き、彼らの創造活動を励ました。田代家を訪れた画家には、森田恒友・山内神斧・小川千麿・近藤浩一路らがあり、後に、頭取を勤めていた第七七銀行飯坂保養所に日本水彩画会会員の写生旅行を受け入れたりもしています。また画家たちとの交流を会津の漆器産業の振興に活かそうとした試みが注目されます。大正八年（一九一九）に行われた会津若松の白木屋漆器店階上での漆器図案展覧には小川芋銭、石井柏亭らが携わった漆器が陳列されました。

こうした活動の中、蘇陽は大正七年に

喜多方美術倶楽部を結成し、会長となります。名簿には蘇陽をはじめ十六人の喜多方の名士たち、顧問の小川芋銭、森田恒友以下、日本画、洋画六三人の画家が名を連ねました。残念な事に、活動が長く続く事はありませんでしたが、数年後の美術倶楽部の新築・来遊画家の歓迎・展覧会の開催・美術鑑賞の向上などを目的とする同会の理念は今なお色あせていません。

さて、本図に話を戻します。本図の芋銭自筆の箱書きによると、本図は大正七年の正月に描かれています。田代家に遺された『書画買入帳』を見ると、芋銭は前年の十二月二十五日から同年の二月二日まで田代家に滞在しており、鍾馗などの絵や書、羽織裏、袱紗、さまざまな漆画などを制作しています。本図についての記載はありませんが、本図もまた、この滞在中に描かれたのではないのでしょうか。なお、同年五月五日の表装代支払いの中に「小川芋銭飲中八仙桐箱の覆ひ」の項があり、これは本図のためのものでしょうか。

今回紹介した芋銭筆「飲中八仙図」の落款には、「於山都酒家／芋銭子」とあります。山都酒家は酒造業も営んでいた田代家のことと思われます。『書画買入帳』によれば、大正四年にすでに芋銭の「飲中八仙図」、「飲中八仙歌」双幅が田代家に購入されています。個人的な酔態を描く「飲中八仙歌」は田代家にとつて、また酒をこよなく愛した芋銭にとつて格別な画題だったのでしょう。芋銭作品の多くが会津を離れた現在、本図は喜多方美術倶楽部と会津の文化を記念する作品の一つとして重要です。その再登場を心から喜びたいものです。

参考文献 一階堂充「福島と小川芋銭」
（『福島県立美術館研究紀要第一号』一九八六年）
「喜多方美術倶楽部と大正浪漫展」図録
（喜多方市美術館 一九九八年）

トピックス

新ハンスオンコーナー

「ねむひのみちへ、平安時代の土器」のねむひのみちへ紹介

体験学習室のハンスオンコーナーがリニューアル。今をさかのぼること二二〇〇年・・・平安時代に生きた人々が使った食の道具を、発掘資料をもとに復元しました。形を、重さを、手ざわりをぜひ体感してみてください。ここではその「ねむひのみちへ」を紹介しします。

①平安時代のお茶わん、つき（坏）を持つ

今のお茶わんとあまり形が変わらないことに気がつくと思います。そのため今のような底を手のひらにのせ、ふちに親指をかける持ち方はこの頃から始まったとも考えられています。

②かめ（甕）の上にこしき（甑）を乗せる

こしきの底には穴があいています。こしきは米を蒸すための土器で、すのこをひいた上に米を入れて、水を入れたかめの上に乗せ、カマドにかけられました。そう、この時代、米は蒸して食べることが多かったようなのです。

③2種類の土器の違いを見分ける

一つは、土師器。焼き方は縄文土器と同じ野焼きです。この時代、どこの家庭でも使っていた土器です。もう一つは、須恵器。古墳時代に朝鮮半島から伝わった焼き物です。こちらは窯で焼かれます。ねずみ色をしており、かたく焼きしまっているのが特長です。土師器よりは高級品といったところでしょうか。

この他にもいろいろさわって、古代の人の思いにもぜひさわってみてください。

（考古担当 横須賀倫達）

秋の企画展

「あみかみかえ300万年前のふくまへ」

今から三〇〇万年前頃の時期は、新第三紀鮮新世と呼ばれる地質時代に含まれています。この時代の後半には、南北アメリカ大陸をつなぐパナマ地域が陸地となり、太平洋と大西洋が隔てられて、北極の氷河（氷床）が大規模に広がるなど、地球規模の大きな環境変化が起こりました。そしてこの頃、日本列島では山脈の姿がはつきりとしてきて、現在の地形の骨組みができあがりました。陸上火山活動も盛んに起こっていました。

福島県内の浜通り地方には、クジラなど海に住む哺乳類や貝などの化石、また、会津地方には当時の森林のようすを示す植物化石など、この頃の海や陸地の様子を示す自然史記録がいくつも残されています。特に最近、浜通りからはアシカやオットセイなどの化石もたくさん見つかっています。

この企画展では、これらの化石や岩石などの資料に基づいて、三〇〇万年前頃のふくしまの自然環境をご紹介します。自然史環境をぜひ紹介したいと思います。

（自然担当 相田優）



富岡町の富岡層から見つかったアシカやオットセイのあごの骨の化石（約300万年前）個人蔵

■秋の企画展は、平成一九年一〇月六日（土）～一二月五日（日）まで

常設展示室「歴史・美術」テーマ展示

「会津を訪れた画家たち」
喜多方美術倶楽部
会期 六月一九日(火)～七月二九日(日)
「ふくしま窯めぐり1―会津本郷焼―」
会期 八月四日(土)～九月一七日(月)
「けんぱくの宝―県博収蔵美術工芸資料展―」
会期 九月二二日(土)～十一月一八日(日)

第3土曜イベント

◎館長土曜講座
「東北学2」
講師 館長 赤坂憲雄
日時 七月二一日(土)午後一時半～三時
「民具から見た列島の文化」(仮称)
講師 館長 赤坂憲雄
日時 九月一五日(土)午後一時半～三時
◎四季イベント
「真夏の夕べ 野外映画会 ゴジラ」
日時 八月一八日(土)午後六時～八時半

講演・講座

※は要申込

◎企画展関連行事
「記念シンポジウム」
「樹と竹・列島の文化、北から南から」
パネラー 物質文化研究所一芦舎代表
名久井文明さん
鹿児島県歴史資料センター 黎明館学芸課長
川野和昭さん
福島県立博物館学芸員 佐々木長生
福島県立博物館長 赤坂憲雄
コーディネイター 福島県立博物館長 赤坂憲雄
日時 七月二二日(日)午後一時半～四時半
◎記念講演会
「もう一つの日本文化」
講師 福島県文化財センター 白河館館長 藤本強さん
日時 七月二九日(日)午後一時半～三時

◎関連講座

「会津地方の樹皮文化」
講師 学芸員 佐々木長生
日時 八月四日(土)午後一時半～三時
「製作実演 皮箆・荷縄・籠づくり」
日時 九月一六日(日)

◎美術講座

※「漆の技に挑戦―木と漆の」
アクセサリーI
講師 漆工芸家 須藤紀雄さん
日時 七月一日(日)午後一時半～三時
※「漆の技に挑戦―木と漆の」
アクセサリーII
講師 漆工芸家 須藤紀雄さん
日時 七月八日(日)午後一時半～三時
「展示室講座3 喜多方美術倶楽部の」
画家たち
講師 学芸員 川延安直 小林めぐみ
日時 七月二八日(土)午後一時半～三時
「展示室講座4 焼き物はここを見る」
講師 学芸員 川延安直 小林めぐみ
日時 九月一日(土)午後一時半～三時

◎考古学講座

※「高校生のための考古学基礎講座①」
申込終了
講師 学芸員 森幸彦 他
日時 七月一日(水)午後五時
※「高校生のための考古学基礎講座⑤」
申込終了
講師 学芸員 森幸彦 他
日時 七月二五日(水)午後五時
※「高校生のための考古学基礎講座⑥」
申込終了
講師 学芸員 森幸彦 他
日時 八月八日(水)午後五時
※「縄文土器をつくろう1」
講師 学芸員 森幸彦
日時 八月一八日(土)午前〇時～午後二時
※「縄文土器をつくろう2」
講師 学芸員 森幸彦
日時 八月一九日(日)午前〇時～午後二時

※「高校生のための考古学基礎講座⑦」
申込終了

講師 学芸員 森幸彦 他
日時 八月二二日(水)午後五時
※「高校生のための考古学基礎講座⑧」
申込終了
講師 学芸員 森幸彦 他
日時 九月二二日(水)午後五時
※「高校生のための考古学基礎講座⑨」
申込終了
講師 学芸員 森幸彦 他
日時 九月二六日(水)午後五時
※「縄文土器の野焼き」
講師 学芸員 森幸彦 他
日時 九月三〇日(日)午前〇時～午後三時

◎歴史講座

※「はじめての古文書講座3」申込終了
講師 学芸員 阿部綾子
日時 七月一四日(土)午後一時半～三時
※「はじめての古文書講座4」申込終了
講師 学芸員 阿部綾子
日時 八月一日(土)午後一時半～三時
「シリーズ警梯山1 恵日寺絵図を読む」
講師 学芸員 木田浩
日時 九月八日(土)午後一時半～三時

実演

場所 体験学習室

「昔語り」
講師 語り部 横山幸子さん
日時 七月一九日(日)午前〇時～二時
※「草木染め1」
講師 染織工芸家 山根正平さん
日時 八月二五日(土)午前〇時～午後二時
※「草木染め2」
講師 染織工芸家 山根正平さん
日時 八月二六日(日)午前〇時～午後二時

木曜の広場

場所 講堂 入場無料

旅人たちの見たふくしま
◎第四回「喜多方美術倶楽部と 会津を訪れた画家」
講師 館長 赤坂憲雄 学芸員 川延安直
日時 七月五日(木)午後一時半～三時
◎第五回「民芸運動と会津本郷焼」
講師 館長 赤坂憲雄 学芸員 小林めぐみ
日時 八月二日(木)午後一時半～三時
◎第六回「高橋由一の描いたふくしま」
講師 館長 赤坂憲雄
福島県立美術館学芸課長 伊藤匡さん
日時 九月六日(木)午後一時半～三時

体験講座

※は要申込

※「はねざるをつくろう」
講師 展示解説員
日時 九月二三日(日)午後一時半～三時
「はくぶつかんで遊ぼう!」
場所 体験学習室

「七夕かざりをつくろう」
日時 七月七日(土)
午前九時半～午後四時半

「かざぐるまをつくろう」
日時 八月二二日(日)
午前九時半～午後四時半

*時間内随時受付 所要時間二〇分程度

常設展無料開放日

八月二日(火) 県民の日

七〇九月の休館日

七月 二日(月)・九日(月)・一七日(火)・
二三日(月)・三〇日(月)
八月 六日(月)・二〇日(月)・二七日(月)
九月 三日(月)・一〇日(月)・一八日(火)・
二五日(火)